

修士課程

英語学専攻
国語国文学専攻
心理学専攻

英語学専攻カリキュラム

修士課程英語学専攻は、英語学を総合的に研究し、体系的な研究指導を行うことを目的とする。個別言語としての英語の性質を、音声・音韻、文法、意味の各分野において探究した上で、人間に固有の能力としての言語の普遍的特性を求めるといふ、現代の言語理論の方法論に則った研究を推進する。さらに、これを基盤として、社会言語学、心理言語学、言語哲学、言語情報処理などの関連領域を研究することによって、人間の社会的特性、思考や習得のメカニズムに多角的なアプローチをおこなう。

1. カリキュラムの特色と構成

- (1) 音声・語・文法・意味を中心とする現代言語学の「中核分野」を主軸として研究し、言語の性質を探求することで人間の認知能力を解明することを目標とする。
- (2) 小規模ながら、英語学・言語研究の各分野に教員を配しており、総合的な研究・研究指導が可能である。学生は、特定の一つの分野での研究に限定するのではなく、複数の分野を習熟するようカリキュラムを編成している。
- (3) 現代の言語研究では、基礎的研究方法としての語学力とコンピュータの使用は不可欠な道具である。本専攻では、研究推進に必要な語学力の訓練と、コンピュータの基礎から高度な使用までの実習をカリキュラムの重要な位置に据えている。
- (4) 語学力の訓練とコンピュータの実習は教育やコンピュータの関連業種に生かされることは言うまでもないが、理論的研究の方法の中にも、実務に有益なものは少なくない。語学系の科目や、「コンピュータ・イン・リサーチ」「フィールド・ワーク」「言語と統計」など、実務への応用が期待される、実務系の科目を重点的に履修することを可能にするカリキュラムを編成している。
- (5) 本専攻では、学生の専攻分野によってコース分けをするのではなく、上に述べた総合的な学習を前提として、個人の進路志向に基づいたゆるやかなコースを設定し、伝統的な研究者志向の学生だけでなく、語学の向上を重視して教育や実務に役立てようとする学生や、実務的技能を重視して教育・実務の現場での応用に役立てようとする学生の志向を尊重し、カリキュラムの履修や学位の認定に幅を持たせている。

以上の特色をふまえ、本専攻では次の系統の授業を提供し、構造的に組織する。

語学系統 英語力の向上を目的とする。

英語学系統 英語学の理論的分野および英語学に隣接する応用的分野を研究する。

実習系統 研究・実務の両方に応用できる技能の実習（「コンピュータ・イン・リサーチ」、「フィールド・ワーク」、「言語と統計」など）を中心とする。

2. 授業科目一覧表

英語学専攻授業科目一覧表

【2022年度入学生】

系統	授業科目	科目 ナンバー	配当 年次	開講 区分	週 時間	単位	備 考		
語 学	* リサーチ・プレゼンテーションA	ME501A	1	前期	2	2			
	* リサーチ・プレゼンテーションB	ME501B	1	後期	2	2			
	* アーギュメンテーションA	ME601A	2	前期	2	2			
	* アーギュメンテーションB	ME601B	2	後期	2	2			
英 語 学	I 群	* 英語の構造	ME5110	1	前期	2	2		
		音声学・音韻論	ME5120	1・2	前期	2	2		
		言語と知識	ME5130	1・2	前期	2	2		
		意味論・語用論	ME5140	1・2	前期	2	2		
		英語授業論A	ME515A	1・2	前期	2	2		
		英語授業論B	ME515B	1・2	後期	2	2		
	II 群	言語と社会・談話分析	ME5210	1・2	前期	2	2	2023年度不開講	
		音韻論・形態論	ME5220	1・2	後期	2	2		
		文法と意味	ME5230	1・2	後期	2	2		
		社会言語学・変異理論	ME5240	1・2	後期	2	2		
		言語と認識	ME5250	1・2	後期	2	2		
		日英対照文法論	ME5260	1・2	後期	2	2		
		英語教授法A	ME527A	1・2	前期	2	2		
		英語教授法B	ME527B	1・2	後期	2	2		
		語学教育理論A	ME528A	1・2	前期	2	2		
		語学教育理論B	ME528B	1・2	後期	2	2		
		文化学・異文化理解	ME5290	1・2	前期	2	2		
		バイリンガリズム	ME5310	1・2	後期	2	2		2023年度不開講
		児童英語教育	ME5320	1・2	後期	2	2		
		言語と数学	ME5330	1・2	集中	2	2		隔年開講
言語科学方法論	ME5340	1・2	前期	2	2	2023年度不開講			
言語と情報	ME5350	1・2	後期	2	2	隔年開講			
実 習	* コンピュータ・イン・リサーチ	ME5100	1	前期	2	2			
	フィールド・ワーク	ME5200	1・2	前期	2	2			
	言語と統計	ME5300	1・2	前期	2	2			

*は必修科目

3. 修了要件・単位履修方法

修士課程を修了するには32単位を修得し、研究指導を受けた上、後に述べる最終試験に合格しなければならない。32単位の修得に関しての指導方針は、次のとおりである。

32単位の内訳は、以下の①～③とする。

- ① 必修科目12単位（語学系統8単位、英語学系統2単位、実習系統2単位）
- ② I群より4単位以上
- ③ II群より8単位以上

本専攻は、修士課程においては学生は英語学の特定の分野に研究をしぼるのではなく、可能なかぎり幅広い複数の分野を学習するべきであると考えている。従って、本専攻では、学生の進路志向により、3つのゆるやかな意味のコースを設定し、それぞれの志向にあった履修の方法を提案している。

- A 語学充実コース
- B 実務志向コース
- C 研究者志向コース

学生は指導教員と相談しながら語学系統、英語学系統、実習系統のそれぞれから自らの目標に合わせた履修計画を立てる。

修士課程学生は、在学中に研究倫理教育の講習を受けなければならない。

4. 論文審査と学位認定の方法

英語学専攻では、学生の志向にあわせて、当該のコースで、上のガイドラインに沿った授業の履修をし、かつ修士論文を提出し、審査を受ける。

- A 語学充実コース
 - 英語力を認定する筆記・口頭試験を受験する
- B 実務志向コース
 - 受験者が選択した実習の技能を認定する筆記・口頭試験を受験する（データベースやコーパスの制作も含まれる）
- C 研究者志向コース
 - 修士論文で扱った分野と異なる分野で、「研究論文」1編を期日までに提出して審査を受ける。

修士論文および最終試験についての詳細は、オリエンテーション時に配布するガイドラインを参照のこと。

5. 修士論文 審査基準

修士論文は大学院での研究教育の成果を表すものとして、次の基準を満たすものでなければならない。

- (1) テーマの適切性：修士論文としてふさわしい研究テーマの拡がりや深さがあること。
- (2) 研究史の把握：当該の研究テーマについての先行研究が十分に理解され、検討されていること。
- (3) 新規性：先行研究の理解をふまえ、独自のデータを提示するなど、当該の研究テーマの発展に貢献する内容を含むこと。
- (4) 実証性：当該の研究テーマについての経験的証拠が論文の中で十分に示されていること。
- (5) 論証の健全性：当該の研究テーマについての主張の論理的妥当性が論文の中で明快に提示されていること。
- (6) 倫理的配慮：研究方法や研究対象に対する倫理的配慮がなされていること。内容によっては神戸松蔭女子学院大学研究倫理委員会の承認を得なければならない。

提出にあたっては次の事項に留意すること。

- (1) 使用言語は英語または日本語とし、母語でない言語で執筆する場合は知識のある母語話者によるチェックを受けること。
- (2) 学術論文として適切な形式上の要件を満たしており、細部に関しては、専攻で配布する「学位論文作成などに関するガイドライン」に従っていないといけない。
- (3) 本人以外の知見を参照する時は適切な方法で引用し、他者の著作権を侵害するものであってはならない。

6. 研究・学修指導に関するガイドライン

■指導教員について

修士課程英語学専攻では、前期後期の各学期ごとに指導教員を変更することを認めている。したがって、修士課程在籍中に少なくとも2人以上の教員を指導教員として希望することが望ましい。これは、学生ができるだけ幅広く、言語学・英語学・英語教育に関する指導を受けることを期待し、それを可能にするためである。

各学生は各年度の初めに指導教員の希望届を教務課に提出する。また、9月1日（金）～9月22日（金）の間に、後期の指導教員変更の届けを出す。この場合、次の点に注意して届けること。

- (1) 修士課程2年次後期の指導教員は修士論文の主たるアドバイザーとなるので、執筆予定の修士論文の内容にふさわしい教員を、当該教員と相談の上届けること。
- (2) 修士課程1年次の後期（ないし2年次の前期）に、1年次の前期とは異なる指導教員の指導を受けることが望ましい。
- (3) 各学期の初め、指導教員決定後に研究計画書を指導教員に提出する。様式は自由だが、指導教員と協議した上で提出すること。計画書には、当該学期の履修科目と、その学期に重点的に研究する予定の分野に関する具体的な計画をできるだけ詳しく書くこと。
- (4) 指導教員の授業に出席する他、アポイントメントをとって定期的にミーティングをもち、研究の進展状況を報告すること。
- (5) 各学期の終わりに、指導教員の指示に従った書式の研究報告書を指導教員に提出すること。

■履修について

1. 下位分野

言語学・英語学には、音韻論、形態論、統語論、意味論、社会言語学、心理言語学、計算言語学、応用言語学（英語教育を含む）などの下位分野がある。自分の興味・関心が言語の性質や働き、または外国語の教育や子どもの言語習得のいずれかであろうとも、音韻論、統語論、意味論などといった言語の基本的な構造に関する強固な土台が必要になる。1年次前期の「英語の構造」でこれらの分野について概観するので、この授業の中で言語学の基礎を固めてほしい。

2. 研究対象

分野が大体定まったら、研究の対象となる現象を絞る。その際、あまりにも狭い現象に絞ってしまうと、後に、修士論文としての膨らみをもたせるのに苦勞することになるが、かと言って、あまりにも広い現象を扱おうとすると、与えられた年限では完成しないことにもなりかねない。研究対象の適切な広さについては、指導教員と相談の上で決めること。

3. 先行研究の把握

自分の研究テーマの先行研究を適切に把握することこそ、修士課程での学修・研究活動におけるもっとも重要な部分である。修士論文において、当該の研究テーマが過去にどのように研究され、それについてどのような知見が表され、どのような論争が存在したかを適切にまとめることは不可欠な部分となる。先行研究を見るにあたっては、その分野の専門家である指導教員の助言を求めることが重要であるが、インターネットのGoogle Scholarなどを利用して学生自身が関与する文献を調べることが可能であるし、論文などの著作物がインターネット上に公開されていることも多いので、それらを効率的に利用することも必要である。本学の図書館は比較的蔵書が充実しており、図書館蔵書検索システムOPACを活用することは大学院生として必須のことである。

4. オリジナリティ

修士課程での学修・研究において高度なオリジナリティが即座に求められるものではない。修士課程のレベルでのオリジナリティは、先行研究を着実に把握することの上のみ存在することを認識するべきである。自分ではオリジナルなアイデアと思っても、それが過去においてすでに常識的な知見となっているということはよくあることである。

従って、修士課程のレベルでのオリジナリティは、先行研究を適切に把握した上で、過去の代表的な研究の知見についての自らの考えを述べる、あるいはあるポイントについての相反する考え方がある場合に、それらについて自らの立場を表現するなどがオリジナリティの表現であるが、それらもあくまで先行研究の成果に根ざしたものでなければならない。

■修士論文について

それぞれの専攻の最終年度には、学位論文を提出する。英語学専攻の修士論文の作成・提出の際には、以下の事項を満たすこと。

1. 修士論文の題目提出と論文提出の日程は以下の通りである。
 - (a) 修士論文を2023年度に提出する予定の者は、研究題目の登録を、9月25日（月）～9月30日（土）の間に、教務課でおこなう。
 - (b) 修士論文は、2024年1月6日（土）～15日（月）の間に、教務課に提出する。その際、論文（正本1部、副本2部）、論文要旨（3部）、所定の学位申請書を添えて提出すること。
 - (c) 論文要旨は、論文本文の言語にかかわらず英語と日本語で作成する。
2. 論文の使用言語は英語または日本語とする。英語が望ましいが、対象言語が日本語であり、大量の日本語データを提示する必要があるなどの場合は、日本語による執筆でもやむをえない。この場合、あらかじめ指導教員の許可を得ること。
体裁は、英語・日本語とも、A4横書き、左右上下のマージン、約2.5cm、フォントサイズ12ポイント、1頁あたりほぼ30行である。枚数の制限は特に設けないが、修士論文としてのレベルを満たす必要にして十分な量にすること。

■重要な日程

修士課程を通じて、定期的に中間報告会をおこなうとともに、副課題報告会、学位論文の最終報告会をおこなう。これらの報告会においては、わかりやすいプレゼンテーションを心がけること。

	修士論文	副課題
2023年 7月7日（金）		提出
9月中旬	中間報告会I	
9月25日（月）～30日（土）	題目登録	
11月末	中間報告会II	
2024年 1月6日（土）～15日（月）	論文提出	提出
2月9日（金）		
2月下旬	最終報告会	

■その他

学会参加

一定の学問分野ごとに学会という、研究者同士の集団が組織されている。言語関係の学会も、規模の大小、地域の広がりに応じて、例えば、日本言語学会、日本英語学会、関西言語学会、日本語学会など、さまざまなものがある。英語教育に関しては、JACET（大学英語教育学会）、JALT（全国語学教育学会）などがある。

学会に参加することで、最先端の研究発表にふれたり、同年代の大学院生の研究活動を知ることができる。修士課程1年次でいきなり学会に参加しても、どうせ難しくわからないとせず、理解できなくてもその雰囲気になれることで得られるものがある。

本大学院は学会参加に対して補助を行っているので、大いに利用してほしい。

修士2年次の学生は学会に参加するだけでなく、研究発表に応募することにチャレンジしてほしい。発表論文をまとめることは修士論文を作成する中で大きなステップとなる。応募した発表が採用され、研究発表することは将来に生きる業績となるだけでなく、他大学の研究者から貴重な質問やコメントを受けることも期待できる。